

「月並」の季重なり

—— 明治俳句の類型から ——

青木 亮人 (同志社大学大学院博士後期課程)

E-MAIL ele3601@mail2.doshisha.ac.jp

はじめに

『花供養』は京都芭蕉堂主が芭蕉追善に刊行した俳諧選集で、天明六年(一七八六)から明治期に至るまで確認される。句は全国から寄せられ、時代ごとの各地方の蕉門系俳人の多寡や入集した俳人名からその人脈が窺えるなど、当時の蕉門系俳壇の推移を辿るのに格好の資料といえよう。

収録された句群にも興味深い点が存在するが、なかでも次の句群が注目される。

- ・ 『花供養』文化二年(一八〇五)
月一つ 残して寒しちる さくら 節之
 - ・ 『花供養』文化六年(一八〇九)
おく山の 椿流れて水ぬるむ 湖水
 - ・ 『花供養』明治三年(一八七〇)
山の梅雪 おしわけて咲にけり 梅里
 - ・ 『北山華供養』明治五年(一八八二)
鶯や愛宕の雪も消えぬうち 両川
- 句の詳細は省くが、これらは「季重なり」とされる作品であり、

現代俳句では忌避される句法に他ならない。季重なりとは一句中に複数の季語を詠んだ句を指すが、『花供養』には江戸期から明治初期に至るまで見られるのである。

現在、アート・リサーチセンター^(注1)では『花供養』を網羅的に調査し(『北山華供養』は除く)、体系的な再評価を行っている。この作業を通じていかなる諸相が判明するか、その一端を季重なりに注目することで検証するとともに、現代俳句と異なる認識が明治期に存在したことを考察したい。

1. 季重なりに対する認識(現代)

まず、現代俳句における季重なりの定義を確認してみよう。

一句の中に季語が二つ以上重なることをいう。俳句が季語を通して特定の季節の感動を詠む極めて短い詩であることから、季重なりは基本的に好ましくない。そうでなくとも短い一句の中で、季節への感動が分散し散漫になりかねないからである。(『現代俳句大事典』〔三省堂、平成17・11・20〕「季重なり」項。執筆者、岩岡中正)

「二句の中に季語が二つ以上重なる」のが季重なりであり、忌避される理由としては「短い一句の中で、季節への感動が分散し散漫になりかねない」（『現代俳句大事典』）とされている。また季重なりを戒める理由としては、次のように説明されることも多い。

俳句には、一句の中に季語を一つ入れる約束があります。（略）

季語は、春、夏、秋、冬、新年の天象、地象から動植物、生活文化まで、あらゆる事物があり、俳句を作るとき一句の中心になるものです。正岡子規は「季語の連想力によって、はじめて十七文字という短い詩の世界が、広い外界を獲得するのだ」と言っています。（『俳句技法入門』〔飯塚書店、平成4・11・30〕「季語（季題）」項）

「俳句には、一句の中に季語を一つ入れる約束」が存在し、そして季語は「一句の中心」となるため「一句一季語」が「約束」であるという。同語反復に近い説明であるが、この発想の源流として引き合いに出されるのが正岡子規（慶応3〔一八六七〕〜明治35〔一九〇二〕）であり、次は『俳句技法入門』が参照した子規の一文である。

・此（一季語、引用者注）連想ありて、始めて十七字の天地に無限の趣味を生ず。（子規『俳諧大要』『日本新聞』明治28・10・27）
 ・四季の題目は、一句中に一つづつ、ある者と心得て詠みこむを可とす。（『俳諧大要』『日本新聞』明治28・11・1）

「季語」は「連想」を有し、僅かの字数で言外に「無限の趣味」を発生させるために短詩型俳句において有利であり、その季語を効果的に用いるには「一句中に一つ」で良い、と彼は説いたのである。入門書類は「一句一季語」の根拠としてこの子規の一節をあげる場合が多く、現代俳句がその俳句観の源流を子規に求めていることが窺えよう。^{注2)}

しかし、「一句一季語」は江戸期俳諧にも「約束」であったわけでないことは、すでに先学の指摘するところである。たとえば江戸中期の与謝蕪村は季重なりを意図的に詠んでおり、それは季節のうつろいやあわいを表現するための技法であった。^{注3)} 次にはあげるのは蕪村の季重なり句である。

(例) 梅咲いて小さくなりぬ雪丸げ

梅(春)・雪(冬)

(例) 初雪や消ればぞ又草の露

初雪(冬)・露(秋)

梅の咲く春には雪だるまも溶けて小さくなってしまっている、という一句目は「梅(春)・雪丸げ(冬)」を併用することで冬から春に至るうつろいを表現した作品である。また二句目は、冬の初雪が草に降りつもったが溶けて晩秋の露のようになってしまったため、冬から再び晩秋に戻ったようだと、という季のあわいを詠んだ句であった。^{注4)} 先学は、江戸期には季節の推移やあわいを詠んだ季重なりが多々存在することを指摘したのである。

そして、季重なりは明治期にも依然詠まれ続けていた。その一例が先の『花供養』明治三年版であるが、実際は『花供養』のみの特徴ではなく、ある種の俳人達に一般的な句法であったことは現代さほど知られていない。

その俳人達とは子規に「月並」（常識と類型に頼った句）と称された俳諧宗匠達であり、またその主宰俳誌等に投句した人々である。それは俳誌のみならず、当時の類題句集（季語別に例句を列挙した句集）や句作入門書等にも季重なりは多数掲載されているのであった。

本稿は季重なりがどの時期から否定されたのか、またどのような俳人達がそれを主唱したかといったことを問う以前に、近現代俳句

の源流とされる子規と同時代に季重なり句が存在していたことを明らかにし、またそれがどのような作品であり、そしてどのような季感に支えられていたかを試みに考察するものである。

2. 季重なりに対する認識(明治)

「月並」の季重なりを具体的に分析する前に、明治期「月並」において季重なりがどのように認識されていたかを検討したい。

季重なりを判別するには、詠みこまれた季語が「季語」として認知されていたか否かの分析が必要であろう。具体的には季寄(四季ごと)に季語を分類した俳書)や類題句集等における季語の立項の有無を調査することでその傾向は窺えるが、一方で「月並」句には著大な季語を使用した季重なりが多数存在しており、詳細な検討を加えずとも季重なりと判断しうる作品が多くを占めるのである。

先ほど『花供養』所収の季重なりをあげたが、それらに詠まれたのも代表的な季語であった。

月一つ残して寒しちるさくら(文化二)

※月(秋)・寒し(冬)・さくら(春)

おく山の椿流れて水ぬるむ(文化六)

※椿(春)・水ぬるむ(春)

山の梅雪おしわけて咲にけり(明治三)

※梅(春)・雪(冬)

鶯や愛宕の雪も消えぬうち

〔北山華供養〕明治一五)※鶯(春)・雪(冬)

これらは類題句集等では立項されており、一例に『明治新八百題』(行庵酒雄選、温故堂、明治一一)をあげてみよう。

花も実も備はる月の一夜かな (〔月〕項)

梅なども咲て日並の寒さかな (〔寒〕項)

花と見しは雪雲と見しは桜かな (〔花雪〕項)

月雪もしたしみぶりや玉椿 (〔椿〕項)

二筋にわかれて水の温みけり (〔水温〕項)

梅はやき在所や雪のこゝかしこ (〔梅〕項)

花と見るばかりに雪の降る日かな (〔雪〕項)

鶯のはや来た跡は垣の雪 (〔鶯〕項)

句の詳細は省くが、各季語が単独に立項されていることが知られ、よって先述の『花供養』句群も季重なりであったといえよう。そしてまた、『明治新八百題』のような類題句集が季重なりを多く掲載している点に、現代と異なる「季語」の認識が窺えないであろうか。

子規が「四季の題目は、一句中に一つづゝある者と心得て詠みこむを可とす」(前掲「俳諧大要」)と述べた後に出版された類題句集『古今俳諧発句万代集』(弘文館、明治30・12・16)にも、季重なりは多く収録されている。

梅を出て柳に入るや夷舞ひ (さらば)

(春)、「夷舞」部

紅葉よりあかくてそれも若楓 (梅室)

(秋/夏)、「若楓」部。梅室は江戸後期の著名俳人

秋風に巻葉折らるゝはせを哉 (凡兆)

(秋)、「芭蕉」部。凡兆は芭蕉門の俳人

蝶にあふ日もある旅の小春かな (梅)

(春/冬)、「小春」部

句の詳細は省くが、明治期の句と江戸期の古句とを織りませながら、梅室や凡兆等の著名俳人の季重なりを多数例示するのであった。あるいは、季重なりは当時の句作入門書にも多く見られるのである。

散かゝる梅にひかんの入日哉 (蘆帆)

『発句独案内』（金川書店、明治28・11・27、31頁）

散かゝる梅に彼岸の入日哉 芦帆

『発句作法案内』（積善館、明治29・10・1、102頁）

両書は句作の要点を初心者向けにまとめた俳書で、子規が（前掲）と述べた頃と同時期の出版である。散りかかる梅花に彼岸（春）の入日がありがたく照り映える、という引用句はともに「梅」項にあげられていた。

これら明治期の類題句集や入門書等において、季重なりがかくも散見されるのはなぜであろうか。

「季重なり」という語は、近代に使用され始めたという先学の指摘がある。加えてそれは否定すべき句法という意で使用されてきたが、もし季語を複数詠んだ句を無条件に季重なりとすれば、先述の句群は全て季重なりとなる。

しかし、『現代俳句大事典』等のような意味での季重なりを「月並」俳人達がどの程度意識していたかは疑問である。むしろ『発句作法案内』のような入門書に季重なりが例示された当時、それは忌避すべき句法ではなく、また類題句集等における広範な例示からすればかえって見慣れた句法であったのではないか。

近現代俳句は「一句＝一季語」の源流を子規に求める傾向が強い。ため、明治期以降は季重なりが否定されたと捉えがちであるが、明治期にも季重なりは多数存在していた。現代と明治期では季語に対する認識が異なっていたといえ、すなわち「月並」においては季重なりに対する意識自体が希薄なのであり、よって季重なりを否定的な意も存在しなかった可能性が高いのである。これが明治期「月並」に季重なりが多い一因といえよう。

では、それは実際にどのような句であったのか。

3. 明治期の季重なり（同季）

まずは夏の同季の季重なりから見えていきたい（以下の引用句は、子規が批判した宗匠達の俳書・俳誌に記載された作品）。

鶯も老ひけり梅も実になりて 琴塘

（『明治新撰俳諧一万集』博文館、明治24・11・17、18頁）

麗らかな鳴き声で春を告げた鶯も夏になればその声は衰え、数多の花に先がけて花開いた梅も夏には実のみとなったという句で、春の「鶯・梅」が夏には「老ひけり・実になりて」とかわり果てるさまが「も」で強調されており、季節の推移を感じさせる句である。次は春の季語を三個重ねた例である。

梅にあけ柳にくれて春の月 開化

（『俳諧黄鳥集』11号、明治25・3、6頁ウ）

梅を愉しむ（梅に朝日が射す）ことから一日が始まり、柳を眺めて（柳に夕陽がさす）一日を終えた後、夜空には春月が架かっているという句である。「梅（朝）―柳（夕）―春の月（夜）」と一日の推移を季語を並べて詠むと同時に、春には一日の内にかくも風流な景物が並んでいることを機知的に詠んだといえよう。

これと同趣向の句が同雑誌に載っている。

梅にはれ柳に降て春の雨 孝齊

（同右、5頁ウ）

梅には降らないが柳には降る、それこそ春雨の情緒である、という句意であろうか。当時はこれらのように季語を三個用いた句は散見され、次もその例である。

梅咲ぬうくひすも啼け此長閑 甚一

（『俳諧明倫雑誌』3編、明治14・1、18頁上段）

春を告げる梅がようやく咲き、春の気分を一層確かなものにさせ

るには鶯も啼いてほしい、いかにも春らしいこの長閑な日に、という句である。春の深まりを望む心情を「梅・鶯・長閑」と戯れのよりに続けざまに詠んだ趣向である。

次に、秋の季重なりをあげてみよう。

しら萩やしほる、迄は露も花 一心

〔俳諧鴨川集〕2号、明治27・10、9頁

萩の枝葉が萎れるまではうねる枝葉に置く露も花同様の美しさであるという句であり、次も同趣向の句である。

をく露も花の数なり月のほき 世外

〔俳諧芭蕉の露〕1号、明治26・1、19頁上段

月光に照らされた萩の夜露も花として数えるにふさわしい輝きを放つ、というのであった。

ところで、これらの「萩・露」は実際には和歌以来の趣向に沿っている。

折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の

枝もたわわにおける白露 詠人不知

〔古今和歌集〕

歌の詳細は省くが、「萩・露」の連想は江戸期俳諧にも連綿と継承され、芭蕉も「白露もこぼさぬ萩のうねりかな」と詠むなど類型として定着しており、先の二句は「萩・露」の類型をなぞった句といえよう。

また「露」は、「月見」とも併用されて詠まれることが多い。

瓢箪に露の置まで月見可南 藤岨

〔俳諧鴨東新誌〕86号、明治25・12、4頁才上段

身は露に濡たも知らぬ月見哉 一壺

〔前掲〕俳諧鴨川集〕2号、12頁

持参した瓢箪に露が置くほどに月を長らく眺めたことだ、という

一句目、わが身が夜露に濡れたのも気づかないほどに月見をしていたことだ、という二句目である。「月見」はそれなりの時間を有するとはいえず、「露の置／身は露に濡た」ほど微動だにしないわけではない。それを「露の置まで／身は露に濡たも知らぬ（ほどに）」「月」に魅入っていたとひねることで風流心を強調したのである。

「月並」俳誌には、これらの他にも季重なりが多数見られるのであった。

春風や梅の香おくる庭の面も 規矩雄

〔前掲〕明治新撰俳諧一万集〕、10頁上段

暑き日の蟻さへ這はぬ岩の上 米華

〔前掲〕俳諧鴨川集〕2号、20頁

眼に添ふや萩もす、きも月の草 友山

〔前掲〕俳諧芭蕉の露〕1号、16頁

比良は雪堅田は小春日和哉

〔俳諧鴨東新誌〕85号、明治25・11、7頁ウ下段^{〔注7〕}

句の詳細は省くが、これらからは明治期の宗匠達が現代と異なる季感を有していたことが知られるのである。

ところで、明治期の季重なりには注目すべき特徴が存在する。四季で多数を占めるのは春で、また同季より他季の季重なりが顕著に見られ、中でも圧倒的多数が「冬／春」の季重なりである点に他ならない。

4. 明治期の季重なり（他季）

なぜ「冬／春」の季重なりが多数なのか。一因として、和歌以来の定型表現に沿って詠まれた可能性があげられる。和歌における冬と春のあわいの表現は、「雪／梅・鶯・霞」等で詠まれ続けた類型で

あった。

梅の花それとも見え久方の

あまぎる雪のなべてふれれば 詠人不知

〔古今和歌集〕、梅／雪

春きぬと人はいへども鶯の

なかぬかぎりはあらじと思ふ 壬生忠岑

〔古今和歌集〕、立春と鶯の到来のずれ

梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の

はね白たへにあわ雪ぞ降る 詠人不知

〔新古今和歌集〕、梅・鶯／淡雪

吉野山雪は降りつつ春霞

立つは春日の野辺にぞありける 凡河内躬恒

〔躬恒集〕、山の雪／野辺の春霞

雪の降りしきる中、百花に先がけ「梅」は花咲き、かすかに春の訪れを感じさせる（二首目）。そして春の到来は「鶯」の声によって極まるのである（二首目）。ようやく訪れた「鶯」が、「梅が枝」を移りながら声を響かせる早春に空から舞い降りるのは「あわ雪」であり（三首目）、また深山に雪は降りつつも野辺にはすでに春霞が立っているのであった（四首目）。古来より和歌は冬に春を待ち望み、春に至って冬の名残を認める季感を濃厚に保持し続け、またその表現を洗練させてきたのである。

このような季節のあわいの感覚は、江戸期俳諧においても類型であった。

薄雪や梅の際まで下駄の跡 魚日

〔続猿蓑〕元禄11（一六九八）

鶯の雪踏落す垣穂かな

一桐 〔猿蓑〕元禄4（一六九二）

(111)

時ならぬ春雪が降り、足跡が雪に残るのも厭わず「梅」の様子を氣遣って「際まで」確かめに行ったという魚日句、また春を告げる「鶯」が「雪」を踏み落とすとした一桐句は、ともに冬と春とのあわいを生かした趣向といえる。

この「冬／春」のあわいを詠む趣向は、明治期も強い規範となつて句作に影響を及ぼし続けたのではないか。

春風にいつまで栗のかれ葉哉 蝶夢

〔前掲『発句独案内』19頁、前掲『発句作法指南』97頁〕

蝶夢は江戸中期の俳人であり、世は「春風」に満ちているのに「いつまで」も残る「栗のかれ葉（冬）」よ、という句である。入門書にこのような季重なりが例示されるとともに、当時の俳誌には「冬／春」の季重なりが圧倒的に多いのであった。しかし、その多くは共通した趣向に沿って詠まれており、その第一は「冬に春を待ち望む」という趣向である。

梅迄は春の来てあり年のくれ 長洲

〔風雅乃葉〕8回、明治26・3、5頁上段

世の外の春を待らん鉢叩き 東舟

〔前掲『俳諧鴨東新誌』86号、2頁才〕

花を咲かせる「梅迄は」春が訪れたが、他は寒さの厳しい「年のくれ」のままであり（一句目）、またそのような冬にあって、人外の世間に身を置く「鉢叩き」は春を待ちかねるように瓢箪をうち鳴らす（二句目）のである。あるいは次の句も同様の趣向であろう。

桜はと思ふ日和や小六月 波正

〔前掲『俳諧鴨東新誌』86号、巻頭〕

初冬のある日の暖気において春の「桜」へ想いを馳せた句である。このような「冬に春を待ち望む」趣向は季語を変奏させながら繰り返し詠まれており、次は冬の「梅」から春の「鶯」に想いを馳せた

句である。

鶯もなかせて見たし室の梅 友規

〔俳諧明倫雑誌〕158号、明治29・11、9頁

折りとつた梅枝を室内で活けて野外の梅より早く咲かせるのが「室の梅」であるが、一足早く冬に花を咲かせた「室の梅」を見るにつれて「鶯」の声までも手をかけて鳴かせたいという句であり、次も同趣向である。

黄鳥に便りをしたし冬の梅 踏雲

〔前掲〕『俳諧鴨東新誌』86号、3丁ウ下段

「春ですよ、早くその声を響かせて下さい」といまだ現れない鶯に手紙で知らせてやりたい、と鶯を擬人化して穿った作品といえよう。

そして待ち望んだ春が到来した時、多くその喜びは「春の訪れと冬の名残」という趣向で詠まれていた。これが「冬／春」の季重なりの第二の共通点であり、具体的には「梅」「鶯」「霞」が詠まれている。まず、「梅」を見てみよう。

遠山のゆきみて梅の笑ひけり 諏訪 林鶴蔵

〔俳諧正風雑誌〕5号、明治27・3、24頁下段

さつと来る山風寒し梅のはな 信濃 篤里

〔俳諧正風雑誌〕5号、14頁下段

梅か香や寒さののこる桶の底 新川 四葉

〔俳諧新報〕1号、明治12・1、10頁下段

梅か香や地まで届かぬ庭の雪 下総 以兄

〔俳諧新報〕2号、明治12・2、8頁下段

梅か香や今朝は氷らぬ硯水 遠江 雪洲

〔前掲〕『俳諧黄鳥集』11号、5頁ウ

梅咲くやまた降る雨も雪ましり 一保

〔前掲〕『俳諧明倫雑誌』3編、13頁上段

梅咲くや軒の氷柱の落ちる音 近江 江月

〔前掲〕『明治新撰俳諧一万集』、23頁下段

「遠山」はいまだ雪に覆われているが、麓の「梅」はすでに花を咲かせている（二句目）。それは「山風」がいまだ寒い時候であり（二句目）、また「桶の底」に「寒さ」の残る早春でもあった（三句目）。しかし、「梅」とともに訪れた陽春において「硯水」が「氷」ることはすでになく（四句目）、「雪」は「雨」まじりに（五句目）、あるいは「地まで届かぬ」淡雪となり（六句目）、そして「軒の氷柱」は音を立てて「落ちる」のである（七句目）。

次は「鶯」句をあげてみよう。

黄鳥の来てちらしけり庭の雪 糸磨

〔俳諧明倫雑誌〕160号、明治29・1、11頁上段

先述の「鶯の雪踏落す垣穂かな」（『猿蓑』所収）と類想の作品であり、「ちらしけり」というひねりが句の眼目といえる。^{（注）}

そして、最後に「霞」の例句をあげてみよう。

雪なから春たつ山のかすみ哉 柳蛙

〔前掲〕『俳諧明倫雑誌』3編、19頁上段

雪のある山をつゝみて霞かな 静雅

〔俳諧明倫雑誌〕157号、明治28・10、10頁下段

遠山はまた雪なから初霞 酔月

〔前掲〕『俳諧鴨東新誌』86号、3頁ウ

遠山は雪未たしろきかすみ哉 可洗

〔前掲〕『俳諧芭蕉の露』1号、15頁下段

いずれの句も「山」は雪に覆われているが「霞」はすでに立ちはじめ、春を感じさせるといふ句である。明治期「月並」において、「梅・鶯・霞」は冬をふりはらって春を告げる代表的な季語であったことが知られよう。そしてこれらの趣向は、先述の四首のような和

歌が連綿と詠み続けた類型に沿っているといえるのではないか。

ところで、早春にまだ残る「雪」は春が深まるにつれ溶けゆくものであるが、その様子は次のように詠まれている。

初春に雪の達磨はやつれけり 風袋

青柳のさらりと雪をふるひ鳧 祖柏
〔前掲『明治新撰俳諧一万集』、11頁下段〕

水になる雪や椿は灯をともす 万籟
〔俳諧明倫雑誌』158号、明治29・11、16頁〕

〔前掲『発句独案内』、21頁〕
初春を迎えて冬の「雪達磨」は小さくなりゆき（一句目、先述の蕪村句と同趣向）、または「雪」が「青柳」から「さらり」と溶け落ち（二句目）、そして「椿」が咲き誇る頃には「水」となるのである（三句目）。

このように、「冬／春」の季重なりは「冬に春を待ち望む」「春の訪れと冬の名残」の二趣向に沿ってほぼ詠まれており、またそれらは和歌以来の定型をなぞらえた表現であったといえる。

以上、「月並」における季重なりの特徴を概観したが、翻って子規に戻れば、彼にとってはそれら全てが和歌に遡ることの可能な「月並」であり、まさに否定すべき使い古された趣向であったため、毎月の句会や俳誌で飽かずそれらの類型を詠み続ける俳人を「月並」と批判したのであった。

では、子規達はこのような季重なりを詠まなかったのだろうか。

5. 子規達の季重なり

結論からいうと、子規達は実際には季重なりを多数詠んでいる。まずは同季の季重なりから見よう。

水に富む里や梅有柳あり 樵山

梅桜うくひすひばり野は広し 濤声
〔ホトトギス』3号、明治30・3、17頁上段。子規選〕

〔前掲『ホトトギス』3号、21頁下段。碧梧桐選〕
「梅」も「柳」も乱れ咲くそのさまは、「水」に不足することのない豊かな里であることを想わせるという樵山句、早春の梅も仲春の桜も花咲いている上に鶯や雲雀まで鳴いている、これらが一堂に会するとはいかに広い野原である、という濤声句である。

青薄萩の若葉を圧すべく 虚子
〔日本新聞』明治29・7・10〕

五月雨や釣鐘覗く蝸牛 脚月
〔日本新聞』明治29・5・30〕

青薄が萩の若葉を圧倒するかのように生い茂りはじめた、という虚子句、じめじめとした五月雨の中、蝸牛が釣鐘の内側へ這おうとしているという脚月句ともに夏の季重なりであった。次に秋の季重なりをあげよう。

鶏頭やはいれば奥は黄菊白菊 桃雨
行く秋や紅葉の中の一軒家 子規
〔日本新聞』明治26・11・3〕

〔店先／家の前／庭先には〕鶏頭が植わっており、奥には丹精こめて作られた黄菊白菊があるという桃雨句、そして子規句は、過ぎゆく秋、見れば赤く染まった紅葉の中にただ一軒家があるというのである。

山茶花や日南に氷る手水鉢 碧梧桐
煤掃やきのふもけふも雪かふる 可全
〔日本新聞』明治28・12・1〕

〔日本新聞〕明治26・12・24

ともに冬の季重なりで、咲き誇る山茶花に覆われているため、手水鉢が南向きにも関わらず氷ついているという碧梧桐句、外は昨日も今日も雪が降りつづけ、こちらは家に籠もって年末の大掃除をしていることだという可全句である。

次に他季の季重なりをあげてみよう。実際、子規達においても圧倒的に多いのは「冬／春」の季重なりである。

鶯や善光寺いまた雪の中 其朝

〔ホトトギス〕2号、明治30・2、21頁下段

比良は雪唐崎青し初かすみ 瓢亭

〔新俳句〕民友社、子規選、明治31・3。「霞」項

雪やんでほつと木陰に春の月 枝英

〔日本新聞〕明治29・5・2

谷川の落葉古りにし春の水 李坪

〔ホトトギス〕2号、明治30・2、18頁下段

こちらでは鶯が鳴いているが、山深い信州の善光寺ははまだ雪に覆われている（其朝句）。また、比良山においては雪に覆われているが麓の唐崎では松がはや青み、その山と麓とを初霞が包みこむのであった（瓢亭句）。そして雪がやみ、雲間から春の月が現れた時、木陰にほつと光が射すのであり（枝英句）、あるいは谷川に落葉が降りしきったのも去年のこと、今や落葉は朽ちはて、川には春の水が流れている（李坪句）。

このように、子規達に季重なりを見出すのは容易であった。子規は俳論で「四季の題目は、一句中に一つづ、ある者と心得て詠みこむ」（前掲「俳諧大要」）と述べたが、実際には季重なりを多数詠んでいたのである。

では、論と作品が一致しない子規達をどのように捉えればよいの

か、また彼らが批判した「月並」句の季重なりをどのように評価すればよいのであろうか。

おわりに

宗匠達の俳誌等における季重なりは、多くが和歌以来の発想をなぞる内容であったといえる。「月並」に季重なりが多い一因として、明治期には和歌に端を発する季感がいまだ身近であった可能性が高いことがあげられよう。

そして、この点において「月並」は評価可能ではないのか。すなわち、和歌以来の類型表現を明治期俳句に至るまで保存し続けたのが「月並」であり、それが定型であること自体に価値が存在するのである。これまで子規が宗匠達への批判をこめた「月並」という符丁を使用したのは、それが従来通りの季感と趣向を遵守したことに価値が存在すると見なしたためであった。

同時に、子規達にも「月並」同様の季重なりは存在しており、また内容もどの程度の相違があったかは疑問といえ、むしろ両者は実作者として近い側面を有していたのではないか。子規達もまた、和歌以来の趣向や季感を十分に身につけた俳人達であったのである。

ここで考慮すべきは次の点であろう。第一に「俳諧大要」は実際には初心者への啓蒙を意図した俳論であるため、子規は句作入門として「一句一季語」を述べたという点である。

第二は、類題句集や季寄における季語の立項は分類上単一であったとしても、句作現場では季節のあわいやうつろいといった和歌以来の季感がいまだ定着していたという可能性に他ならない。季語を分類せねばならない俳書や作法書における「季語」の位相では「一句一季語」に近い認識が存在していたが、実際の句作においては

洗練された和歌以来の趣向から、あるいは現実の生活における実感から発せられた季感に沿って季重なりが詠まれていたのではないか。よりいえば「季語」に対する認識と、句作上での趣向や実際の季感との間にずれが生じていた可能性が高い。

この点からすれば、類題句集等で季語が単一に立項されながら季重なりが例示され、あるいは子規の論と実作にずれが生じていたのは矛盾ではなく、複数の位相における季感の判断が互いに乗り入れたためと推定される。

しかし、現代俳句の事典や入門書類は子規が論上で主張した俳句観に沿うのみで、明治期にそのような複数の季感が存在していた可能性に留意することは稀といつてよい。そのため、このような現代であるからこそ本稿で扱った「月並」の季重なりや寛政期から明治期まで刊行された『花供養』が、近現代俳句の季感を問い直す句群として価値を帯びるのではないか。

明治期の季重なりは多くが「月並」であった。しかし、それらの作品群は「一句〓一季語」が「約束」(前掲『俳句技法入門』)となつたのが明治期より後である可能性を示唆し、ひいては「一句〓一季語」という「約束」を発生させ、そして季重なりを後方に追いやつた近代俳句の論理とその枠組みをも問い直す契機を示してはいないであろうか。

注

- (1) 現在、立命館大学アート・リサーチセンターのうち、文部科学省C0 Eプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」拠点・日本文化研究班の京都俳諧研究会が『花供養』調査に携わっている。
- (2) 現代の俳句事典及び入門書等における季重なりの説明はおよそ二種類

であり、季重なりに触れず「一句〓一季語」を前提として話を進めるか(この時に多く子規が参照される)、初心者に困難な句法として戒めるかである。このことから、実作における季重なりは技巧を要する句法のために成功する確率が低く、よって入門書類では否定的に述べられるという事情が考えられる。季重なりを考察する際、理論上とは別に実作における難易度も考慮する必要がある。

- (3) 江戸期の季重なりに関しては、東聖子『蕉風俳諧における「季語・季題」の研究』(明治書院、平成15・2・10)、清登典子『蕪村俳諧の研究』(和泉書院、平成16・11・20)、宇城由文「几重―季節のうつろい」『俳文学研究』43号、平成17・3)等が詳細に分析している。明治期の季重なりを考察する上でも非常に示唆的である。

- (4) この蕪村句の季重なりに関しては清登典子『蕪村俳諧の研究』(前掲)にすでに指摘がある。また、句の解釈は『蕪村全句集』(おうふう、藤田真一・清登典子校注、平成12・6・30)を参照した。

- (5) 「季語」は明治期に定着しておらず、「季題」「四季の題目」「季の詞」等が併用されていたが、本論は「季語」で統一した。

- (6) 前掲『蕉風俳諧における「季語・季題」の研究』の指摘によれば、高浜虚子『俳句入門』(内外出版協会、明治31・4・20)が「季重なり」の嚆矢という。それは次のような一文である。「季重りといふことあり。月並宗匠などは一概に季重りを排斥すと聞けど、一概に排斥するは僻せりといはざるべからず。(略)句に季を重ね用ゆる可否のごときも進みたる作者の技倆、進みたる読者の嗜好に一任する方かえつて誤なく、なまじいに規則を設けて強てこれを制せんとする時は自縄自縛に陥りてその害かえつて少なからずとせず」(「季重り」項)。「月並宗匠」が虚子の指摘するような認識を有していたとすれば、本稿の主旨と正反對の意見を「月並宗匠」が抱いていたこととなるが、詳細は不明である。今後の調査に待ちたい。

(7) 「暑き日の蟻さへ這はぬ岩の上」(『俳諧鴨川集』2号、明治27・10) は、実際は「蟻」が季語として認められていたか微妙である。たとえば、類題集である『発句古人五百題』(明治)は、「蟻」ではなく「羽蟻」として立項している。

(8) 魚日句、一桐句の解釈は、『芭蕉七部集』(新日本古典文学大系70、岩波書店、白石悌三・上野洋三校注、平成2・3・20)を参照した。

(9) 明治期、「春の鳥が雪を散らす」という趣向句は多数見られ、「鶯」の他には「しら雪を蹴立て揚るひはり哉等哉」(『俳諧季奇発句作法指南』明治29・10・1、101頁)といった「雲雀」等も顕著である。

(10) 「月並」と子規達の季重なりは、内容より表現に相違があるといえよう。たとえば、虚子句「青薄萩の若葉を圧すべく」における「べく」は蕪村句から影響を受けているが、このような表現は宗匠達の俳誌等にはほぼ見当たらない。また、碧梧桐句「山茶花や日南に氷る手水鉢」の「日南に氷る」といった措辞(元禄の一笑句「名月の日南にはする小舟かな」等が存在するが、類例が少ない)も「月並」句にまず見られない表現であり、子規達の句が新鮮であったとすればこれら珍しい措辞にあったと推定される。両者の表現の相違に関しては別稿に譲りたい。

(11) なかでも、子規は和歌から俳諧に至るまでの多くの季節に関する類型表現を知悉していたといえる。たとえば、彼は「梅」(『日本新聞』明治32・2・12)において『古今和歌集』等の和歌の「梅」と江戸期俳諧における「梅」句とを多数例示しており、「梅」がどのような趣向で詠まれてきたかを熟知していたことが窺える。

(12) 「一句」一季語」の風潮がいつ頃より発展し、定着したかを考察する際、子規以降の俳句の趨勢を分析する必要があると同時に、江戸後期以降に流行した類題句集の存在も考慮に入れなければならない。一季語を立項し、その例句を掲げる際、複数の季語が同等の存在感を有す

る句はどの季語に分類すべきか判断に迷うためにそのような句は記載されない可能性が高いためである(清登典子氏の教示による)。また、注2で述べたように、俳句の季重なりは本来高度な技巧を要する句法のため、江戸期も「一句」一季語」が結果的に句作の基本であったと推定される。しかし、現代ほど季重なりに神経質であったとは考えにくい。そのため、「一句」一季語」が定着したのはやはり子規以後の可能性が高いといえよう。

